

エリクソンの

「Dr.ボルクの

ライフサイクルに

ついての省察」から

津守 眞

賞など、私には無縁のものと思っていたのに、四月号に記したように、思いがけずペスタロッチー教育賞を頂くことになり、忙しく過ごした。ペスタロッチーの名前は倉橋惣三先生から早くに聞いていた。ペスタロッチーが妻アンナの死を悲しんで、とぼとぼと墓に向かう姿を思うと痛ましいと先生は何度か私に話されたことは、五十年経った今も忘れない。私の妻は、何度も大病をしたが、幸いなことに健在で、私自身はいつの間にかペスタロッチーが死んだのと同じ年齢になった。私が大学を辞めた時に始まった「保育研究グループ」はるにれ」の会で私は毎年二回話をするが、今年の二月には、エリク・H・エリクソン編『壮年期』という書物の中の論文、「Dr.ボルクのライフサイクルについ

ての省察」の第一部『野いちご』³という映画を取り上げることにした。エリックソンが晩年ハーバード大学で「人間の伝記的研究」という題目の絵演習を行った時、最初に学生たちにこの映画を見せてから本論に入ったという。私は、私の養護学校で毎月母親たちに教養講座と題して話をしてきた。エリックソンの話をした時に、ひとりの母親が『野いちご』のビデオをタビングしてくださいました。そのおかげで「はるにれ」の会でもこの話ができたのである。その話のあらずじはこうである。

七十六歳のスウェーデンの老医師、Dr.ボルクは、退職した町から生地ルントへ自動車の旅をする。その古代の教会で彼の五十年間の功績を記念して名誉博士号を授与されることになった。はじめは飛行機で行くことにしていたが、急に息子の嫁マリアンヌと一緒に自動車で行くことにする。これは彼の子ども時代にさかのぼるとともに、彼の未知の自分にまで深くさかのぼる象徴的な巡礼の旅となった。

ルントは私も行ったことがあるので、親しみを感じて映画を見た。私の友人であり、師でもあるエディット・フェルメール先生に案内されてオランダから汽車で行った印象深い旅だった。

最初に、Dr.ボルクが最近見た奇妙な夢が語られる。「ボルクはいつも朝の散

歩に行く。北国の夏の朝日に輝く街並みはからっぽで誰もいない。眼鏡屋の店に大きな時計がかかっているが、その時計には針がない。その下

にかかっている眼鏡をかけた大きな目から血が流れている。ボルクは自分の時計を出してみると、それにも針がない。耳にあてると彼自身の心臓の鼓動が聞こえる。激しく感動して、その男は振り向いた。彼には顔がなく、直ちに倒れた」。

針がないとはいったい何なのかと私は長年考えていたが、ここで語られる一連の旅の途中の物語は、時間を超えた、どこにでも起こる、人生の中の出来事をさしているのかもしれない。

映画には幼い時の思い出の場所が現れる。恋人がいとこに奪われ、そのためにボルクは人嫌いになって研究に没頭する孤独な老人になる。興味深い旅の途中の出来事が語られ、遂に目的地に到着する。名誉ある式典になるが、ボルクは夜の歓迎晩餐会には出席しない。うれしいけれども若い時に思う華やかさは感じない。一日は終わり、時計が十一時を打つ。雨が降り始める。彼はもう一度、野いちごの小道を、幼い日から老年になるまでのことを思い起こす。

今回「はるにれ」の会で、私は長年、共に保育を学んできた若い人たちと一



緒にこの映画を見ただけでほとんど講演をせずに終わった。年齢も違い境遇も違う保育者たちはそれぞれに考えることがあったと思うのだが、私の話がなくて寂しかったとの感想を寄せてくださった方もあり、自分の思いに任されてよかったと言う方もあった。私は申し訳なかった気もするが、共通体験の場を提供することで役を果たしたのではないかと思う。その日の保育は、誰にも教えてもらえない、それぞれが自分で考えて実践するというよりほかないという厳しさがある。

誕生から毎週つき合ってきた、私共の幼い孫は五歳になった。途中の一日一日は長いが、過ぎればあつという間である。今は大人と一緒に仲間のよう雑談する時もあるが、その子の真面目があらわれるのは、ひとこまずつ、丁寧な本気につき合った遊びの中である。遊ぶ最中に思いがけない友達との出会いによって道筋が変えられるときもある。ボルクは旅行をするのに、最初はスピードの速い飛行機を予定していたが、出かける寸前に息子の嫁と一緒に行くことを選んだ。その若い婦人が老ボルクの心に掛かっていた悩みを解く糸口を与えた。婦人もまたボルクとの対話の中で悩みが溶けていく。老人は自らの人生を思い起こし、その時々自分の在り方を考えるとき、仄かな悔いもちりばめられていようが、むしろそれによって人生の新たな洞察を得る。一生涯は飛

行機のように一直線に目的地に向かうとは違う。偶然に出会う道連れを、はじめは煩わしく感じて、そこに意味を見出すことによって、思いがけない豊かな人生になる。

途中、自動車に乗せることになった若者たちとのやりとり、さらに険悪な中年夫婦を乗せるが、やがて、一緒には旅することができずに夫婦を車から降ろして別れることになる。まさに人生の旅にもそのような場面があることを知った。

旅の終わりに、若い息子の嫁は新しい生命を宿していることを告げる。ボルクは、旅の疲れでぐったりしているが、それらを抱えながら、ベッドに入るところでこの映画は終わる。
(保育研究者)

参考

- 1 Adulthood Edited by E. H. Erikson New York: W. W. Norton & Company, 1978.
- 2 Reflection on Dr. Borg's Life Cycle
- 3 『野いちご』イングマール・ベルイマン監督 一九五七年 スウェーデン

訂正とお詫

* 四月号 8 頁 1 行目の「二〇〇二年十一月二十七日」は、正しくは「二〇〇六年十一月二十七日」の誤りでした。訂正してお詫びいたします。